

# 目 次

まえがき

## 第 I 部 日英語の比較研究

第 1 章	日本語の身体属性文と英語の同族目的語構文	2
1.1.	身体属性文と同族目的語構文の共通点	3
1.1.1.	身体属性文の特性	3
1.1.2.	同族目的語構文の特性	4
1.2.	身体属性文と非対格同族目的語構文の共通点	6
1.2.1.	2 種類の同族目的語構文	6
1.2.2.	身体属性文の特性：受け身および wh 疑問の適用可能性	8
1.3.	分析	11
1.3.1.	叙述関係	11
1.3.2.	動詞のタイプ	14
1.4.	理論的意義と帰結	16
第 2 章	日英語の数量詞	18
2.1.	英語の数量詞	18
2.2.	日本語の数量詞	20
2.3.	理論的意義と今後の課題	21
第 3 章	日英語の場所句構文	24
3.1.	日英語の場所句構文の構造	25
3.1.1.	「いる／BE」タイプの非対格化	26
3.1.2.	「くる／COME」タイプの非対格化	28
3.2.	場所を表す PP と方向を表す PP	30
3.3.	理論的意義と今後の課題	32

第4章 低評価を表すナンカと否定極性表現の any の類似性	34
4.1. any とナンカの類似性	35
4.2. any/some とナンカ／クライ	37
4.3. 理論的意義と今後の課題	40
第5章 日英語の中間構文	43
5.1. テアル構文の統語的特性	44
5.2. 日本語のテアル構文と英語の中間構文の統語的特性	46
5.3. 日本語のテアル構文と英語の中間構文の統語構造	47
5.4. 理論的意義と今後の課題	50
第6章 日本語の「い」脱落と英語の wanna 縮約	52
6.1. 「い」脱落が起こる環境	52
6.2. 「い」脱落と wanna 縮約	55
6.2.1. wanna 縮約と隣接条件	55
6.2.2. 「い」脱落ととりたて詞移動	56
6.3. 理論的意義	58

## 第II部 英語の構文研究

第7章 So 倒置構文再考	62
7.1. Toda (2007) の問題点	64
7.1.1. VP 前置の妥当性	65
7.1.2. 主語の後置の妥当性	66
7.2. 代案	69
7.2.1. VP 削除	69
7.2.2. I-to-C 移動の動機付け	71
7.2.3. so 倒置構文の構造	71
7.3. 理論的意義と帰結	74
第8章 場所構文の相関関係	78
8.1. 場所構文の統語構造	79
8.1.1. there および前置 PP の統語位置	79
8.1.2. 後置主語 NP と定性効果	81

8.1.3. 本節のまとめ	82
8.2. 場所構文の相関関係	83
8.3. 理論的意義	88
第9章 there 構文の複文分析：時制の解釈と主語の解釈の相関性	89
9.1. there 構文と時制のパラドックス	89
9.2. there 構文の構造	90
9.2.1. 独立タイプ	90
9.2.2. 制御タイプ	91
9.2.3. 上昇タイプ	91
9.3. 理論的意義と帰結	93
第10章 英語の二重目的語構文と所有者昇格構文	97
10.1. envy タイプの動詞に見られる所有関係	98
10.2. 所有関係から見える構文間のつながり	99
10.3. 理論的意義	101
第11章 With 独立構文の構造とその汎用性	103
11.1. With 独立構文の構造	104
11.2. With 独立構文が現れる環境	107
11.3. 否定倒置および否定極性表現	109
11.3.1. 否定倒置	109
11.3.2. 否定極性表現	110
11.4. 理論的意義と帰結	111
第 III 部 日本語の構文研究	
第12章 日本語の動詞移動	118
12.1. 随意的な動詞移動	119
12.1.1. 「も」のスコープ	119
12.1.2. 「す」の挿入	121
12.2. 尊敬語化による検証	125
12.2.1. 尊敬語文の統語構造	125

12.2.2. 尊敬語文の等位構造と日本語の動詞移動	128
12.3. 理論的意義と帰結	131
<b>第13章 動詞「ある」の統語構造</b>	<b>134</b>
13.1. 動詞「ある」と形容詞述語に現れる「ある」	135
13.1.1. 丁寧語化	136
13.1.2. 否定文	137
13.2. 「ある」/「いる」交替	138
13.3. 理論的意義と帰結	142
<b>第14章 日本語の長距離格付与の可能性について</b>	<b>145</b>
14.1. Ura (2007) の分析とその問題点	148
14.1.1. Ura (2007) の分析	148
14.1.2. Ura (2007) の問題点	150
14.2. 非関西方言における LD-ECM	152
14.2.1. 調査の方法と結果	153
14.2.2. 焦点化による分析	156
14.3. 理論的意義と帰結	159
<b>第15章 とがめ文の統語構造</b>	<b>160</b>
15.1. 高見 (2010) の分析と問題点	161
15.2. とがめ文の統語構造と機能	162
15.3. 理論的意義と今後の課題	168
<b>第16章 「太郎は花子のように英語ができない」の曖昧性</b>	<b>170</b>
16.1. 「ように」句の2つの解釈	171
16.2. 「ように」句に2つの解釈を許す統語条件	172
16.3. 理論的意義と帰結	176
<b>第17章 「ゴミ箱がいっぱいだ」の曖昧性をめぐって</b>	<b>180</b>
17.1. 壁塗り構文の基本的な特性	181
17.1.1. 全体／部分の解釈の違い	181
17.1.2. 省略可能性	182
17.2. 「ゴミ箱がいっぱいだ」の曖昧性	183

17.3.	ゴミ箱構文の成立条件	185
17.4.	理論的意義と今後の課題	190
第 18 章	学校国文法における修飾語の扱いをめぐる	193
18.1.	目的語と修飾語の区別をめぐる歴史的経緯	194
18.2.	目的語と修飾語の区別：新しいデータから	197
18.3.	まとめ	199
第 IV 部 構文の統語的分析と機能的分析：有標性と棲み分け		
第 19 章	非対格性の検証：there 構文と外置構文	202
19.1.	高見・久野 (2002) 再考	203
19.1.1.	非対格性制約とその問題点	203
19.1.2.	機能的分析	204
19.1.3.	代案：高見・久野 (2002) の再解釈	206
19.2.	高見・久野 (2004) への反論	209
19.2.1.	文処理	210
19.2.2.	解釈上／処理上のコスト	211
19.2.3.	有標性	213
19.3.	主語名詞句からの外置と非対格性	214
19.4.	今後の展望	218
第 20 章	自動詞の新分類：there 構文，way 構文， 同族目的語構文の見地から	222
20.1.	自動詞の新分類で捉えられる構文	224
20.1.1.	way 構文	224
20.1.2.	同族目的語構文	226
20.2.	理論的意義	229
第 21 章	Way 構文の動詞の特性	230
21.1.	高見・久野 (1999) および Kuno and Takami (2004) のデータ の検証	231
21.1.1.	放出動詞 (verbs of emission)	232
21.1.2.	run 動詞	233

21.1.3. roll 動詞	234
21.2. way 構文における非能格性制約の妥当性	236
21.3. まとめ	240
<b>第22章 「させ」使役文と非能格性制約</b>	<b>241</b>
22.1. 日本語の2種類の使役文	242
22.2. 高見(2006)再考	243
22.3. まとめ	246
<b>第23章 日本語の動詞句前置構文の分析をめぐって</b>	<b>247</b>
23.1. 高見・久野(2006, 2008)の分析とその問題点	248
23.1.1. 高見・久野(2006)の分析とその問題点	248
23.1.2. 高見・久野(2008)の分析とその問題点	251
23.2. 代案	254
23.2.1. 単一構成素移動制約	255
23.2.2. 適正束縛条件	256
23.3. 非対格動詞を含む動詞句前置構文	258
23.4. 理論的意義	262
<b>第24章 項と付加詞の統語的区別の重要性</b>	<b>264</b>
24.1. 久野(2006, 2008)の主張	265
24.2. 前置詞句の積み重ね	269
24.2.1. 機能的分析の検証	269
24.2.2. 反例の検証	272
24.3. 前置詞句の相対的位置	278
24.3.1. 「本質的」という概念の検証	278
24.3.2. データの棲み分け	283
24.3.3. 関連性理論からの再考	284
24.4. 今後の理論研究の課題	287
あとがき	289
参考文献	293
索引	311